新たなミュージアムに関する基本計画懇談会
個別ヒアリング実施結果（摘録）

１　日　時　　令和５年１１月２日（木）　午前１１時００分～１２時００分

２　開催方法　オンライン会議システムを活用して実施

３　対象者
（１）委員　　垣内委員
（２）事務局　市民文化局市民文化振興室：植木担当係長、篠田職員

４　公開・非公開の別　非公開

５　意見聴取
（１）新たなミュージアムの活動で踏まえるべき社会的要請及び対応方法について
（２）「まちなかミュージアム」と「拠点施設」の考え方について
（３）その他
※令和５年１１月７日（火）に開催した第２回新たなミュージアムに関する基本計画懇談会と同様の資料を用いて意見交換を実施

６　実施結果
（１）新たなミュージアムの活動で踏まえるべき社会的要請及び対応方法について
①新たなミュージアムに必要と考えられる機能について
・「情報プラットホーム」という言葉は、「人材育成機能」や「交流機能」が担う「人づくり」といったイメージにつながらない。何かの情報のプラットホームに受け取られかねないため、名称を考え直した方がよい。

②収蔵品について
・市民ミュージアムは漫画分野が大きな特徴となっていたが、電子書籍化も進む中で、今後どのような方針を考えていくのかが課題である。その他の分野もデジタル化は進んでいくため、収蔵庫の大きさや見せ方をどうするのかという点も考えていく必要がある。
・従来から引き続き市民からの寄贈等が中心になり、公費での購入はほぼない状況と理解したうえで、収蔵品収集の基準を明確化することを検討してもらいたい。すべてを収集するのは難しい。市民ミュージアムにとって価値のあるもの（希少価値を含む）に限定すべきと思う。例えば漫画であれば、かつては紙媒体の雑誌など他のミュージ

アムでも見られるものも重複して収集していたと思うが、原画や一品物の関連資料に絞るなど、ミュージアムのコレクションの在り方をより詳細に検討したほうがよいのではないだろうか。

・ 現物をコレクションするだけでなく、記録保存等多様な方法で、活用を視野に入れたコレクション収集とした方がよいのではないか。

・ これらはセンシティブな課題なので、現場のご意見も聞いて、よりよい方向性を見出してほしい。

（2）「まちなかミュージアム」と「拠点施設」の考え方について

①「まちなかミュージアム」について

・ 「東海道かわさき宿交流館」や「大山街道ふるさと館」など学芸員を配置する施設も出てきていることから、これらの施設・専門家との連携を最大限活用する方向で検討してはどうか。もちろん、これらの学芸員は当該施設での活動が本務であるが、それ等の事業とシナジー効果を持たせながらの活動も可能と思われる。開館に向けた中間段階でのソフト事業を実施する中で、各事業の成果も検証することで、現実的な役割分担が見えてくると思う。

・ 「ミューザ川崎シンフォニーホール」や「カルッツかわさき（川崎市スポーツ・文化総合センター）」等の劇場機能を持った施設のホワイエ等の空間についても、積極的な活用を検討してみてはどうか。

②「修復機能」について

・ 時間と人手のかかる事業だが、必須の事業でもあり、市民の関心をつなぎとめる必要もある。

・ 興味関心のある人々を、ボランティアとして組織化し、専門性を高め、自走化する方向をぜひ検討してもらいたい。それには研修などの先行投資、権限の委譲なども必要となるだろう。ボランティアといっても単なる補助労働力ではなく、主体的、自立的に動ける体制を組んでいけば、（国内外のいくつかの事例にみられるように）重要な戦力になりうると思われる。

以　上

新たなミュージアムに関する基本計画懇談会
個別ヒアリング実施結果（摘録）

１　日　時　　令和５年１１月１５日（水）　午前１０時００分～１１時４０分

２　開催方法　オンライン会議システムを活用して実施

３　対象者
（１）委員　　田中委員
（２）事務局　市民文化局市民文化振興室：植木担当係長、篠田職員
（３）関係者　株式会社トータルメディア開発研究所：水間氏、下島氏、杉山氏

４　公開・非公開の別　非公開

５　意見聴取
（１）新たなミュージアムの活動で踏まえるべき社会的要請及び対応方法について
（２）「まちなかミュージアム」と「拠点施設」の考え方について
（３）その他
※令和５年１１月７日（火）に開催した第２回新たなミュージアムに関する基本計画懇談会と同様の資料を用いて意見交換を実施

６　実施結果
（１）新たなミュージアムの活動で踏まえるべき社会的要請及び対応方法について
①機能の現代の潮流へのアップデートについて
・ 今までの取組を前提にこれからの取組を検討していると思うが、今回は「現代に合わせてどうするのか」という議論が重要である。
・ 【資料１】の情報プラットフォーム機能（機能⑧・⑨）は、機能③～⑦を束ねて提供できるサービスなのではないか。機能⑧・⑨は付加的な機能で書かれているが、現在ではニーズが増していて、そうではないのではないか。
・ 海外では、ミュージアムの役割やそこで起きる活動の様子が変化しているように思う。かつての基本的機能（収集・保管・調査研究・展示等）は必要だが、その重要度が変化し、現代ではそれ以外の機能にリソースが割かれるようになった。例えば、「ミュージアムで学びを創出する機能」、「地域の人々が自身がそのコミュニティに繋ぎとめられていることを省察して再認識するための機能」、「人間にしかできないクリエーション能力を教育するための機能」等が重視されていて、そういったサービスを展開するためのスペース・機能の確保にエネルギーが割かれている。これらは１９８０

年代にはなかったはずの機能で、【資料１】のどこにあるのか考えたほうがよい。

（例）バッファローAKG 美術館

…新しい現代美術作品の展示スペース、それを素材とした子ども向けエデュケーションスペース、子どもの年代別クリエイティブコンテンツを提供するスペース、ミュージアムショップ・カフェ等の広い属性の人を吸引するための機能を増築している。

・ ミュージアムが展示などのコンテンツの提供者で、それを来訪者に鑑賞してもらうような形ではなく、一緒に何かをやってラーニングが生まれることに重点を置く潮流がある。特に、子どもたちのためのクリエイティブコンテンツは、最近では多くの海外のミュージアムなどで重視されているように感じる。

（例）・ジョンＦ．ケネディ舞台芸術センター

…THE REACH と呼ばれる増築棟にアーティストのリハーサルスタジオ兼アウトリーチスペース等を設置。そこでは、子連れで参加できるプログラムや、講演やワークショップ（フォーマルなものではなく、キュレーターやアーティストが一緒にやるようなもの）等にも参加できる。

・バッファローAKG 美術館

…新たなロビーのまわりにクリエイティブ・コモンズのような空間を創出。

・ルイジアナ近代美術館

…積極的にラーニングプログラムを実施していて、中でも増築された「子どもハウス」では、プログラムに家族で参加できる。

・Ｍ＋

…「ラーニングハブ」という学習スペースを備え、様々な世代の人々が参加できる学習プログラムが用意されている。

②新たなミュージアムの強みについて

・ 公的なミュージアムの役割（自治体がコミュニティの中にミュージアムを設けるということ）はどうあるべきか、この機会に問い直す必要がある。「公的なミュージアムであるからこそ、利益を度外視して、コミュニティに対して“そこにしかないサービス”を提供できる。だからこそ新たなミュージアムは必要である」というような考え方をするのがよいのではないか。そのサービスを地域の課題にふさわしいかたちで安定的に提供するためには、「拠点施設」・「まちなかミュージアム」に何が必要で、どうリソースを割けばうまくいくのか…と考えるべきではないか。

・ 周辺都市にいくつもミュージアムが既に存在している中で、新たなミュージアムでどのようなサービスを提供するのか、新たなミュージアムの強みは何で、他のミュージアムと差別化して、そこでしか提供できないものは何か、もっと検討したほうがよい。

・ 川崎の発展は、日本の近代化や工業化と密接に関係している点が面白い。子どもたち

にとっても重要な学びになりうると思うが、川崎市市民ミュージアムではあまり展示されてこなかったように思う。「自分が繋ぎ留められている地域がどのようなもので、その発展の経緯はどのようなもので、その過程での課題をどのように乗り越えてきたのか（あるいは、乗り越えられなかったのか）」というようにコミュニティを省察する（＝自分で考えて学ぶ）ことで、答えの出ていない現代の複雑な課題を思考する能力の育成にもつながるのではないか。過去から積層する出来事のうえに現在があり、必ずしもポジティブとはいえないものも記録し、展示することで学べるものがある。こういったものの展示については、やるやらないは別として、検討したほうがよい。

（例）スミソニアン国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館（アメリカ）

…有形無形の黒人の歴史的な出来事や事物を展示している博物館で、建物ができるのに先行してＷｅｂでコンテンツの提供を開始した。館のメイン展示は、巨大な地下空間の３層構造の展示で、最下層に奴隷貿易時代の暗黒史に関するもの。次の層に公民権運動の時代に関するもの。最上層に現代までの時代の黒人カルチャーの歴史に関するもの（芸能やスポーツなどを含む）を展示している。まさに積層する出来事のうえに現在があることを感じさせる構成となっている。

・ 川崎市市民ミュージアムが「複製芸術」という、近代の技術により可能となったリプロダクションの時代の芸術、そして、大衆により近い位置に存在する芸術に光を当ててきたことは大変面白く、考える必要がある。

（２）「まちなかミュージアム」と「拠点施設」の考え方について

①「まちなかミュージアム」と「拠点施設」の機能分担について

・ 基本的な機能は「拠点施設」に含まれ、それらの必要な要素は残していく必要があるが、「遠くの『拠点施設』まで来てください」という考え方ではなく、「ミュージアム側が腕を伸ばしてサービスを届け、地域に近いところで交流・創発を起こすことで、新たな効果を生む」という考え方で「まちなかミュージアム」を位置づけられるとよいと思う。それには、オンライン等の新しい技術の活用や、開館までに連携した市内既存施設を連携拠点として位置付けて、先行して「まちなかミュージアム」の活動を展開し、それらの活動を「拠点施設」完成後も発展的に継続する等の方法があるのではないか。

・ 生田緑地にはミュージアム群のクラスタが形成されており、新たなミュージアムの整備により、そのクラスターは強化されていくだろう。しかし、地理的には南部からはかなり離れているという現状がある。そういった状況で、新しく中核的なサービスをどう展開していくのかという視点で、資料 12 ページを整理し、「まちなかミュージアム」と「拠点施設」の役割分担ができるとよい。

・ 新たなミュージアムには可能な限り公的リソースを投じるべきだと考えているが、上

述の方向性に合わせて最適化するため、「『拠点施設』はシェイプアップし、余剰のリソースを『まちなかミュージアム』や既存施設との連携へ大胆に振り分ける」という視点で資料 12 ページを作成していけるとよい。

- 【資料３】からは「まちなかミュージアム」の何かが開館後に「拠点施設」に移るような印象を持つが、「まちなかミュージアム」をコントロールするための拠点が柿生の仮事務所から生田緑地に移るイメージではないか。もし「まちなかミュージアム」の活動の比重が「拠点施設」のそれよりも大きくなるのであれば、「拠点施設」に設けなければいけないスペースは必要最小限となり、「まちなかミュージアム」の活動展開のコア、サービス・コンテンツのサポート機能、従前からの基本機能（ミュージアムクラスターの中での位置付けも考えたうえで）、そのほか新たに必要な役割のみになるのかもしれない。そのあたりの考え方の整理が必要である。
- そのようなものになるのならば、日本には類例があまりないものとなるので、学芸側のコンセンサスもきちんと取らなくてはならない。新たな「拠点施設」をつくり、基本機能を提供する片手間で「まちなかミュージアム」の活動はできないため、それなりの体制を早めに組み、先行して「まちなかミュージアム」の担当者が地域と関係をつくりながら活動していけるとよい。

②活動内容について

- 新しく提供する中核的なサービスは、必ずしも箱がないとできないわけでないため、可能な限りフロントフィードして開発・展開するべきである。いくつか先行的に展開するエリア・コミュニティを決め、そこにあったプログラムを開館前から提供していくようなロードマップを敷くべきである。
- 川崎市南部の住民は、他都市のミュージアムのほうが近いこともあると思われる。暫定的に期間限定サテライト施設（例：５～１０年程度で一時的に使えるスペース、取り壊しまで使用可能な場所等）でコミュニティにおけるプロジェクトの運営実験ができるのであれば、モチベーションにもつながるため、事例を調べてみるとよい。そこへスタッフを配置し、コミュニティに近いところで活動すれば、市民は「拠点施設」が遠くてもミュージアムを身近に感じられると思う。

（例）・ＭｏＭＡ　ＰＳ１

…廃校を活用したアーティスト・イン・レジデンスの成功例。元々はアーティスト主体の非営利組織が立ち上げ運営していたが、現在はＭｏＭＡの傘下に入り、メイン施設より離れた川向こうのクイーンズの工場街の古い建物で活動を展開中。

・ディア・ビーコン

…拠点施設から離れた広大な廃工場に展示スペースを設けている。

・ロサンゼルス現代美術館

…建設中にTemporary Contemporaryと呼ばれる暫定ミュージアム（地下工場を改装）を開設した成功例。好評であったため、メイン施設が完成した後も継続している。

- 【資料３】の「市民にとって身近な場所に出向き、アウトリーチ活動を積極的に行う」という表現は、「主体が『拠点施設』にあって、出かけてあげる」というトーンが強い。そもそも「アウトリーチ」という言葉が古い用語で、最近では「コミュニティ・エンゲージメント」等という用語を使っているように思われる。市民の生活しているところが主たる場所であって、そこでどのような活動や経験が起きるのかが重要であり、その機会を提供するのがミュージアムである。現代では、ミュージアム側から働きかけてコミュニティの場所で何かを起こしに行かなければいけないのではないか。
- 生田緑地のアクセスの悪さを逆手に取り、ミュージアムクラスターを強みに、「新たなミュージアムには、そこにしかないものがあり、記憶に残る体験を提供」できる可能性がある。だがコンテンツは必ずしも高尚なものばかりではある必要はなく、「身近なところでも感じられるもの」と「出かけて行って得られる特別な体験」の関係を整理すると良い。そのためには「拠点施設」と「まちなかミュージアム」の双方向の動きが必要である。

以　上

新たなミュージアムに関する基本計画懇談会
個別ヒアリング実施結果（摘録）

１　日　時　　令和５年１１月２４日（金）　午後２時００分～３時１５分

２　開催方法　オンライン会議システムを活用して実施

３　対象者
（１）委員　　金子委員
（２）事務局　市民文化局市民文化振興室：井上担当課長、植木担当係長、篠田職員
（３）関係者　株式会社トータルメディア開発研究所：水間氏、下島氏、杉山氏

４　公開・非公開の別　非公開

５　意見聴取
（１）新たなミュージアムの活動で踏まえるべき社会的要請及び対応方法について
（２）「まちなかミュージアム」と「拠点施設」の考え方について
（３）その他
※令和５年１１月７日（火）に開催した第２回新たなミュージアムに関する基本計画懇談会と同様の資料を用いて意見交換を実施

６　実施結果
（１）新たなミュージアムの活動で踏まえるべき社会的要請及び対応方法について
- 処分してしまった資料の再収集は、緊急性を有するのではないか。現在資料をもっている方がいらっしゃったとしても、時間が経つと散逸してしまう場合もあるため、緊急的に再収集する必要があると感じた。
- 美術館については、収集方針を決めないと無制限になってしまう。「川崎市の市民ミュージアムとして責任、特徴を持って収集していかなくてはならない分野は何か」を明確にしなければならない。それには、他の美術館とのネットワークを構築して、川崎市のミュージアムの特徴を明確にしていく必要があるだろう。
- 「情報プラットホーム」について、“場所”と“機会”をどう作っていくかが問題である。「拠点施設」については、生田緑地内の他の施設とどう分担、相互協力していくかが重要だろう。「まちなかミュージアム」については、モデル（例：小・中学校での展示や教育普及の事例等）が示されるとよい。
- 「人材育成機能」は、どんな人材像を目指して、誰を対象に育成していくのかが明確になるとよい。

（2）「まちなかミュージアム」と「拠点施設」の考え方について

- 「まちなかミュージアム」の展開イメージは、エリアによって変わるかもしれないため、そのあたりも具体的に示されるとよい。
- 資料 12 ページには、例えば、将来的には市民に運営へ関わってもらえるような仕掛けや、市民の文化力を高める取組等の「今から市民にどう関わってもらうか」を具体的に示せるとよい。倉庫を市民に見学してもらい、収蔵品をリアルに感じて現状を知ることができる体験等、そういったものができるとよい。
- 「地域貢献機能」について、「文化観光事業」というキーワードもあるが、他地域や市外から来た人を対象にするということだけでなく、市民自身の健康力、文化力等を高めるような形での地域貢献もあるのではないか。
- 「まちなかミュージアム」について、市だけでなく“民”の持つもの（例：市内の企業の持つ歴史、技術力等）も社会へ発信できればよいのではないか。
- 川崎市市民ミュージアムとしての特性、強み（ネットワーク、物的・人的資源等）を活かし、他施設との差別化を図ることが大事である。生田緑地内の他施設単体ではできなかったことも、新たなミュージアムが生田緑地に移ったことによってできるようになれば、さらに生田緑地の魅力が増すのではないか。

以　上